

第 155 回大会

2017年11月25日(土)・26日(日), 立命館大学 衣笠キャンパス

口頭発表, ポスター発表, ワークショップ要旨

The 155th Meeting of the LSJ

Ritsumeikan University at Kinugasa Campus, 25th and 26th of November, 2017

Abstracts of oral presentations, poster presentations, and workshops

<口頭発表 Oral Presentations>

[A-1]

状態性と事態解釈：アルタ語（フィリピン）に見られる非動作動詞

木本幸憲

従来フィリピンの言語は、動作動詞に関連した形態統語的特異性が注目されてきた。しかし本研究は、可能や状態性などを表す他の動詞クラスに着目し、アルタ語というルソン島北部で話されている言語が、他のフィリピンの言語では見られない述語クラスを持っていることを指摘する。1点目として、フィリピンの大部分の言語は、述語の下位クラスとして、動作動詞と可能動詞の区別を持つものに対し、アルタ語は、動作動詞、可能動詞以外に、状態動詞、形容詞が述語の下位クラスとして区別されることを示す。2点目に、他のフィリピンの言語に見られない状態動詞を示す接辞 *tiC-*, *maja-*, *makan-* は、その使い分けが可能動詞、動作動詞との対応関係から記述可能である、ということを示す。

[A-2]

フィジー語の発言動詞の補文節について

岡本 進

本発表ではフィジー語の発言動詞を (a) 複他動詞、(b) CTV (complement-taking verb) という二つの観点から分析する。

観点 (a) について、「教える」、「命じる」のような動詞で *indirective* 型 (R(ecipient) 項が目的語) と *secundative* 型 (T(heme) 項が目的語) の両方のアライメントが観察される。ただしすべての発言動詞でこのアライメントの交替が見られるわけではなく、使役化接頭辞 *VAKA-* を伴う発言動詞でのみ許容される。動詞の形態変化なしにアライメントが交替するという点で特異である。

観点 (b) について、発言動詞はその T 項が補文節として現れることが多い。補文節の標示が目的を表す副詞節のそれと同形であるため、発言動詞は CTV ではないとも分析できる。しかし本発表は、発言動詞の補文節は「埋め込まれている」と主張する。その根拠として、補文節が態の操作を被ることが挙げられる。さらに、補文節の内容を尋ねる疑問文において、必須項と同じ “what” を用いることから、発言動詞の補文節は項として埋め込まれているといえる。

[A-3]

ブルシャスキー語スリナガル方言で再構成されだした名詞クラス

吉岡 乾

ブルシャスキー語には、大きく分けて4つの、指示対照の性質に依存した名詞クラスがあり、概ね次のような内包に分類できる：ヒト男性・ヒト女性・具象物・抽象物。

通言語的に名詞クラス体系は動的であり、衰えたり失われたりする可能性を秘めている。それは、体系自体が（部分的に）失われたり、複数のクラスが区別されなくなってクラスの数が増えたり、という方向性の現象であるのが一般的である。

本発表では、スリナガル方言の若者言葉で名詞クラス体系が見せた崩壊が、一方向的ではなかったことを報告する。名詞クラスの基盤にあった範疇化の共通理解が一度崩壊し、けれども同時に不合理が生じないように新しい範疇化の理解が構成されて、結果としては形容詞類・動詞類の一致に見られる名詞クラスが4つから5つへと増えている。新しい内包は、ヒト男性・ヒト女性・有生物・「具象物」・「抽象物」（後二者は元来のものとは範囲が異なる）の5つである。

[A-4]

スワヒリ語マクンドゥチ方言の記述から浮かび上がる*-*mala*「終わる」の文法化のプロセス

古本 真

スワヒリ語のマクンドゥチ方言とウングジャ方言には、アスペクトに関する接頭辞-*me-*がある。この接頭辞でマークされた動詞は、どちらの変種でも基準時以前に起きた事態を表す。しかし、厳密にみると-*me-*でマークされた動詞が表す事態は二つの変種で異なる。過去の時点を表す表現との共起の可否、起動相的な解釈の有無、経験を表す用法の有無に着目すると、マクンドゥチ方言ではプロトタイプ的な完了相 (perfect) に近い事態を、ウングジャ方言では完結相 (perfective) に近い事態を表していることが分かる。-*me-*は、動詞*-*mala*「終わる」が文法化した接頭辞とされる (Nurse & Hinnebusch 1993)。通言語的には、「終わる」>> 完了相 >> 完結相という順序で文法化は進展するとされるが (Bybee et al. 1994)、この枠組みに当てはめた場合、*-*mala* から-*me-*への文法化は、マクンドゥチ方言より、ウングジャ方言で進展していることが指摘できる。

[A-5]

ベトナム語の分裂文に関する研究

讃井綾香

コンピュータとして一般に使われる là が焦点明示マーカとして用いられ、「命題関数+là+変項（及び、

chi+変項+là+命題関数)の形を取るという解釈のみが許される文」をベトナム語の分裂文として示し、ベトナム語の分裂文の特徴や成立条件について分析する。また、形式の観察のみでは区別が難しい「Nam là giám đốc. (ナムは/が社長だ)」という典型的なコピュラ文と分裂文の違いを明確に示す。

ベトナム語の分裂文の成立には、話題に上がるものの特定化のプロセスの進行度合いが重要である。文全体の情報量が多く話題に上がるものの特定化のプロセスが進行する場合は、là の前の要素の事物性が低くても焦点明示機能を持つ là を用いることができる。(1)から nhất を削除した(2)は、情報量が十分でないため容認度が下がる。

- (1) Tôi thích nhất là lúc chị cười.
私 好む 一番 時 あなた 笑う
(私が一番好きなのはあなたが笑うときだ)
- (2)? Tôi thích là lúc chị cười.
私 好む 時 あなた 笑う
(私が好きなのはあなたが笑うときだ)

[A-6]

焦点表示と焦点関連表現の関係：ゲイ語の場合

大野仁美

ゲイ語(コエ語族)では、焦点に関連する表現は、語順および形態論的手段によって示される。焦点マーカー *ki* は、一般的に焦点が用いられると考えられている「Wh 疑問文に対する解答」や「修正」においては用いられず(それらは必要であれば語順でもって示される)、「唯一」であることを示す場合や、予想外の状況を表す場合に用いられる。つまりゲイ語においては、焦点マーカーは *information focus* や *contrastive focus* を示すことはせず、*exhaustive/emphatic focus* に用いられる。また、予想外の状況を表す表現に関しては、最も無標の構造をデフォルトセッティング(=categorical)と考えた場合、焦点マーカーのある文を *focus-background* 構造ではなく *thetic* であるにとらえることから説明することができる。本発表では、このように2つの手段によって異なる焦点関連表現がしめされることをどのように説明できるかについて考察した。

[A-7]

分裂構文と疑似分裂構文の区別と使用における前提：シダーマ語の事例からの考察

河内一博

分裂構文と疑似分裂構文は形式上区別される(Lambrecht 2001)。シダーマ語では分裂構文と疑似分裂構文(と思われる構文)の両方に名詞句を形成するクリティックを使う。前者は「節=*hu* 焦点=*ti*」あるいはその倒置の形式を取るが、後者では、節に付くクリティックが形成される名詞句の指示対象と性と数において一致を示す。形式上どちらであるか判断ができない場合があるだけでなく、焦点の構成素の文法関係によりどちらの構文も容認される場合があるため、これらの構文は形式および文法関係において互いに重なり合う部分があると考えられる。また、分裂構文と疑似分裂構文は談話にお

ける使用範囲が同じかどうか議論の余地がある (Prince 1978, Declerck 1988)。シダーマ語の場合、先行研究で他の言語でのこれらの構文の使用に必要であると言われる語用論的前提や話題性的前提が存在しない場合にも使われている事例があることを指摘し、その原因を考える。

[B-1]

クルフ語の自発使役構文

小林正人

クルフ語（インド、ドラヴィダ語族）では動詞語基に再帰接辞 $-r?$ 、受動接辞 $-ta:r?$ 、使役接辞 $-t?$ を後接してヴォイスを交替させる。そうして作られた再帰語幹と受動語幹は受身、可能に加えて自発を、使役接辞は典型的使役に加えて次のような自発使役を表し、三形式とも広義の自発用法を持つ。

gohom-guṇḍa: bagge: k^hok-t?-i:

小麦-粉 とても 咳する-使役-3 人称.単数.非男性

「小麦粉はとても咳が出る（小麦粉はとても咳をさせる）」

本稿では話者からの聞き取りによってこれら三形式の使い分けを調査した。その結果、クルフ語の自発使役が「疲れる」「痛む」「居眠りする」などの非対格自動詞と、「笑う」「思い悩む」など経験者を主語とする他動詞に限られることを指摘する。無生物主語が使役者になることを許容しないクルフ語では自発使役は特異な構文であるが、被動者が表示されず現在形のみで見られることから、これが中間態構文と同様に主題を主語とする属性叙述文の一種であると主張する。

[B-2]

「アラビア語チュニス方言のモダリティ表現と主題人称」

熊切拓

アラビア語チュニス方言は、北アフリカのチュニジア共和国の首都チュニスで主に使用されている言語である。この言語の命題提示に関わるモダリティ表現には、大別して副詞によるものと、人称辞などの人称要素が必ず出現するものの2種がある。本発表では後者のモダリティ表現を取り上げ、人称要素に着目しつつ分類を行ない、モダリティに関わる人称要素が動詞屈折辞の一部、対格、属格などの人称接尾辞などと形態的には多様でありながら、統語的には文の主題人称と呼応しているという点では共通していることを示した。これを踏まえて、この言語においては、形態論的な垣根を超えた主題人称性というべきものが統語論レベルで設定されうることと、この主題人称性がこの言語のモダリティの「場」として機能していることを結論として指摘した。

[B-3]

アゼルバイジャン語・トルコ語と可能表現

系統的・類型的・地理的に非常に近い言語であるアゼルバイジャン語とトルコ語の可能表現を比較し、能力可能と状況可能の言語内区分を再考する。アゼルバイジャン語では事態をあらしめる直接の要因が主体内部にある場合（能力可能）は *bil-* ‘to know’ に由来する形式-*A bil-*を用い、主体外部にある場合（状況可能）は *ol-* ‘to be/become’ 由来の形式-*mAQ ol-*を用いる。他方、トルコ語では主体が特定の場合には *bil-*由来の形式-*Abil-*を、不特定の場合には受身-*Il-*を用いる。たとえば「医者に止められているので、私は泳げない」と「プールが壊れているので〔誰も〕泳げない」はいずれも状況（不）可能とみなせるが、動作主体の特定性が異なる。Az. -*mAQ ol-*と Tr. -*Il-*はいずれも動作主を明示しない非人称的表現に由来するが、前者は与格主語をオプションに標示し広く状況可能を表せるようになった一方、後者はそうならず、あくまで非人称的な状況可能を表すにとどまっている。

[B-4]

保安語積石山方言の三人称代名詞

佐藤暢治

保安語積石山方言には三人称代名詞として、*ɬaŋ* と *gaŋ*（モンゴル文語の *ejen* 「主」と *irgen* 「民」に対応）の二つがある。本発表の目的は、保安語積石山方言における二つの三人称代名詞の使い分けと、それらの歴史的過程を明らかにすることにある。

ɬaŋ は保安語の前段階で「主」から「三人称」への意味変化が起き、三人称代名詞として使われるようになった。両者を繋ぐ意味としては、「物事の当事者」のようなものが想定できるであろう。ただし、この語がなぜ保安語で三人称代名詞になったのかは、今のところ、明らかではない。一方、*gaŋ* は保安語の前段階以前に「他の人」へと意味を変えており、保安語積石山方言の段階になると、さらに三人称代名詞としても使われるようになった。その結果として、*ɬaŋ* は *gaŋ* とは異なり、「他の人ではなく彼」という排他的な意味合いを伴う三人称代名詞へと姿を変えた。

[B-5]

アルメニア語の不定詞による名詞修飾の機能—日本語との対照を通して—

クロヤン ルイザ・堀江 薫

本研究では、寺村(1992)の分類に基づいて、日本語の「外の関係」の連体修飾節とアルメニア語の不定詞による名詞修飾表現の対照を行った結果、アルメニア語の不定詞が「外の関係」の名詞修飾表現として、広範囲で用いられることが分かった。ただし、特定の主要部名詞類に限っては、不定詞の名詞修飾を制限する様々な意味・統語的な制約が働いていることが分かった。具体的には、(i)「内容補充的」連体修飾表現の主要部名詞が「感覚の名詞」であり、主要部名詞の指示対象と修飾節の間に直接的な因果関係を想定しにくい場合（例：彼女が入ってくる姿）、(ii)「相対補充的」連体修飾表現の

主要部名詞が「空間的な関係」を表しつつ直接的な隣接性を表さない場合（例：子供が遊んでいる隣部屋）には不定詞を用いることができず、定形節を用いなければならないという制約が見られた。また、後者に関しては、不定詞が状態性を表せないというアスペクト的な制約も見られた。

[B-6]

中古日本語における動詞とアスペクト助動詞との接続相補性の再評価

廉田 浩

中古日本語におけるアスペクト (Asp) 助動詞, ツ, ヌ, タリ, リの体系とその通時変化を上接動詞群との接続関係の観点から分析する。具体的には, 各助動詞がどの動詞に下接し易いか (=親和性プロフィール) を求め, 二つの助動詞間で親和性プロフィールが逆転しているか (=相補性) を分布の相関で定量化する方法を提案し, 歴史コーパスを使い各助動詞間の相補性を計算する。同時に, 「相補性」自身の意味するところも考察し, 次のような結果を得る。

- (1) 相補的な助動詞ペアでは, 各助動詞自身に内在する文法的意味の違いは大きくなく, かつ一つの共通助動詞によって置き換え可能。即ち, 文法体系としてこの助動詞ペアは冗長な存在。
- (2) 中古 Asp 助動詞中, タリは他の助動詞との相補性が高い。つまり中古の Asp 助動詞体系は, 冗長性が高く, タリに一本化する素地が元々あった。中世に実際その変化が起きたと推定される。

また, 助動詞リの上接動詞活用型が偏っている点についても, 相補性の観点から説明を試みる。

[B-7]

Shift-together in Burji

Sumiyo Nishiguchi

The "shift-together" of person, temporal and locative indexicals under attitude predicates (Schlenker 1999, Anand and Nevins 2004) seems to suggest that the reportative verb is a monster which maneuvers the context parameter in Burji. The binding approach, on the other hand, accounts for self-awareness of the matrix subject which binds the first person pronoun (von Stechow 2003, Ogihara 2006). The monstrous approach does not straightforwardly account for such *de se* or *de te* reading, for the shifted first person pronoun in the embedded clause may co-refer to the matrix subject without his belief of self-awareness. I assume that *tell* in Burji is a belief report so that the world is compatible with Hassan's belief at context world, which implies self-awareness.

[C-1]

エスキシエヒル・カラチャイ語のアクセント

—チュルク諸語のアクセント類型論を視野に入れて—

本発表ではチュルク諸語のひとつであり、危機言語とみなされているエスキシエヒル・カラチャイ語のアクセントについて議論する。具体的には、同言語には「直前の音節にアクセントを置け」とする語彙的な指定をもつ形態素が存在することを示す。

エスキシエヒル・カラチャイ語は他のチュルク諸語と同様、基本的には語末音節にアクセントが置かれる。しかし、否定辞などの形態素が現れる場合、語末音節ではなく、その形態素の直前の音節にアクセントが置かれる。本発表では、これは、これらの形態素に「直前の音節にアクセントを置け」とするアクセント指定が語彙的になされているためであると考えられる。

また、本発表ではこれに続き、チュルク諸語のアクセントに着目した類型論的考察を行う。そして、これまで「語末音節にアクセントが置かれる」という形で一括みにとらえられていたチュルク諸語のアクセント体系には、実際には種々異なる部分があることを示唆する。

[C-2]

印欧祖語 *ōj̥ から共通スラヴ語 y への変化における二重母音のエッジ効果

大山祐亮

共通スラヴ語では印欧祖語の二重母音は全て単母音化するが、*ōj̥の反映形のみは、それを受け継ぐ形態素が具格語尾 -y [i] (< *-ōjs) のみであるため、明らかでない。本発表ではこの y が*ōj̥の規則的な反映形だと主張する。

まず、*-ōjs は第二次口蓋化を引き起こさないという事実に注目し、*ōj̥にはエッジ効果が働き[+back]として振舞うと仮定する。さらに、逆に*-ōjs 自体は前舌化しうるという事実に注目し、前舌化を妨げる効果をもつ u を*ōj̥の反映形の候補から除外する。この事実と*ōj̥ は[-nasal]、[-low]、かつ[+long]という自明の素性値を組み合わせ、y 以外の全母音を候補から除外する。これにより*ōj̥ > y は規則変化だと推定できるようになる。

本発表により、少数の形態素のみに現れる音でも、それが隣接の音に及ぼす影響を素性値から検討することで起こった音変化を推定できる可能性があると主張する。また、この事例はエッジ効果が二重母音にも応用できると示唆するものである。

[C-3]

イロカノ語の音節構造と母音・子音の相互作用

山本 恭裕

本研究はイロカノ語（北部フィリピン）を対象に、音節構造と音節の重さを記述・分析し、その上でこの言語に見られるいくつかの音韻現象を音節構造により統一的に説明することを目指す。

イロカノ語の音節構造は C(C)V(C) であり、必ず頭子音を持たなければならない。音節の重さについては、分布と強勢付与などの事実に基づき次のことを示す：次末音節の母音のみが 2 モーラと結びつき長母音で実現しうる。一方、他の音節は最大で 1 モーラしか持たず、末子音もモーラ支配を受けない。また先行研究で二重母音として記述されている音連続は子音と母音の連続と分析される。

次に、(1) 声門閉鎖音の挿入、(2) 母音の半母音化、(3) 半母音の挿入、(4) 声門閉鎖音の脱落という4つの音韻過程を記述し、これらが適格な音節構造を維持する機能を果たすことを論じる。さらに、イロカノ語の母音と半母音は同一の素性が音節核で解釈されるか否かに依る違いと捉えられることを論じる。

[C-4]

コイサン諸語における器質性構音障害の症例：

軽度舌小帯短縮症のグイ語話者によるクリック子音音素の発音

中川裕・宇野園子

本発表は、コイサン言語学者と言語聴覚士との共同による初のコイサン構音障害調査からもたらされた新知見の要点を報告した。まず、舌小帯短縮症をもつグイ語（コイサン諸語コエ語族）話者を対象として、その症状の器質的な診断、産出音の音声学的な評価と音韻論的インパクトの測定を行なった。結果として、その症例は器質的にも調音音声学的にも軽症でありながら、コイサン音韻論的には「重症」と言える機能負荷的な負のインパクトをもたらすことが、子音目録の縮小および子音頻度パタンの変化という観点から解明された。また、症例に観察された子音代用プロセス（クリックの非クリック化）を分析することで、この代用の背景にある音声生理的メカニズムを浮かび上がらせ、そのメカニズムと不完全調音(undershoot)との関係を論じた。またさらに、その代用音パタンと幼児言語のクリック獲得過程における代用音パタンの類似性を発見して、両者の平行性について考察した。

[C-5]

ポケモンのネーミングにおける母音と有声阻害音の効果

熊谷学而・川原繁人

本発表では、音象徴の観点から、ポケモンのネーミングにおける母音と有声阻害音の効果を検証する。ポケモンでは、そのキャラクターのレベルが上がると「進化」する。進化をすると、ポケモンの名前が変わり、大きさ・体長も共に増える。本研究では、「ポケモンが進化すると、強くなる」ことに焦点を当て、「進化後のポケモンの名前として、有声阻害音が多く含まれる名前や、開口度の大きい母音が多く含まれる名前が相応しい」という仮説を検証した。本実験では、架空の進化前と進化後のポケモンを用意して、それぞれのペアに、名前と想定した無意味語のペアを与えて、どちらの名前が、進化前と進化後のポケモンの名前としてそれぞれ相応しいか選択してもらった。その結果、「進化・大きい・強い＝開口度の大きい母音」や「進化・大きい・強い＝有声阻害音」という音象徴的つながりが、ポケモンの名付けにおいて生産的に成り立つことが示唆された。

[C-6]

定量的な観点から見た上海語の変調域

高橋 康德

上海語では複数の音節からなる形式（語・句）に変調（tone sandhi）が適用され、第一音節の声調が形式全体のピッチを決定する。本研究では上海語の変調域（変調が起きる単位）がどのような特徴を持つのかを定量的な観点から分析する。中国で出版された上海語教材を利用して、約 150 の発話音声から 1762 個の変調域を収集して音節数および統語位置を分析したところ、変調域は 2 音節が最も多く、3 音節以上の変調域では韻律的に自律性がない機能語が含まれる割合が高かった。また、変調域は統語構造に対して敏感でイディオムなど固定化された表現を除くと統語境界をまたいで変調域が形成されることはほとんどなかった。これらの結果は、上海語の変調域が 2 音節からなるフットとおおまかに対応するが、「統語境界の尊重」が「フットの 2 音節性」よりも優先されることを示唆する。

[C-7]

中国語母語話者による日本語語頭破裂音の生成
—子音の調音位置・地域差と VOT の関係—

王 鳳翔

本発表では、筆者が生成実験を行った中国語母語話者 37 名（20 代、女性、後続母音[a]に限定）における日本語語頭破裂音の VOT 値と地域差・子音の調音位置の関係について論ずる。中国語母語話者による日本語破裂音の習得に関しては、これまで数多くの研究が報告されている。しかし、その多くは基本的に日本語母語話者、中国北京方言話者と中国上海方言話者を対象として考察されたものである。また、従来 VOT の研究では言語内の要因に注目したものが多く、言語外的要因に注目して行われた研究はほとんどない。このことは、地域差が VOT の測定値に関与しているか否かがまだ明らかになっていないことを示す。そこで、本発表は先行研究を踏まえた上で、中国語母語話者を対象として日本語語頭破裂音の VOT 値を測定し、測定された結果を地域差及び破裂子音の調音位置に着目して考察する。

[D-1]

日本語を母語とする子どもの所有文の習得について

松藤 薫子

所有の概念は、Taylor(1996), Heine(1997)が用いた家族的類似性に基づき、「所有者(人間)と所有物(価値のある無生物)は近接した位置関係にあり、所有者は所有物を利用するための独占権があり、所有関係が長期にわたる」という特徴を全て満たすものを典型的所有関係、それから逸脱するものを非典型的所有関係と捉える。このような所有関係を表す文の形式には「NP1 {に/は} NP2 がある」「NP1 {が/は} NP2 を持っている」がある。本発表では、まず子どもの自然発話資料（2人 S 児(0;0-6;11)N 児(1;2-5;0), CHILDES, MacWhinney 2000）と発話の誘出調査（28人(2;8)~(6;1)）の分析結果に基づき、日本語の所有文の獲得過程の特徴を示す。次に、その獲得過程には (i) 所有の概念獲得、(ii) 「子どもは形と意味の結びつきにおいて、1対1の結びつきを好む」(Slobin 1973, 1985)という言語獲得原理、(iii) 獲得過程の中間段階の文法の特徴が大人の文法の特徴に影響を与えるという普遍文法の動的な内

部構成(Kajita 1977, 1997)が関与していることを議論する。

[D-2]

日本語学習者にみるフォーカスの韻律的特徴

藤森敦之・吉村紀子・遊佐麻友子・中山峰治

本研究では英語を母語とする日本語学習者が発話するフォーカス文の韻律的特徴を探った。フォーカスは文脈に絡む文意が韻律によりコード化されるため、非常に複雑であり、第二言語習得では困難が予想される。日本語上級学習者 11 名と日本語母語（東京方言）話者 5 名にフォーカス部分が明瞭な会話形式の読み上げ実験を行なった結果、学習者はフォーカス語にプロミネンスを置くことができるようになっているものの、2 種類のフォーカス（「対比」と「情報」）に見られる微妙な韻律的差異を産出するに至っていないことがわかった。特に学習者の対比のフォーカスの方が情報フォーカスよりピッチ幅が小さく、これは対比のフォーカスの方が情報フォーカスよりピッチ幅が大きかった母語話者の結果と異なる。従ってこのような差異を理解するには、日本語の習熟度がさらに上のレベルに到達する必要があると考えられる。

[D-3]

移動表現における着点の有無：通言語的実験研究

江口清子・吉成祐子・眞野美穂・アンナ ボルジロフスカヤ・松本曜

本研究では、描写する移動事象が着点への到達を含むか否かで、言語表現にどのような差異が生じるのかを通言語的に考察する。系統と類型の異なる五つの言語（英語・ロシア語・ハンガリー語・イタリア語・日本語）の母語話者を対象として、映像による実験調査を行なった。経路主要部表示型言語（松本 2017）のイタリア語では、特定の直示的方向への移動の場合に、非到達事象の表現において、通常と異なり、主要部で様態動詞が用いられる傾向 (Aske 1989) が、日本語では、着点の有無によって複雑述語の前項の動詞選択が変わる傾向が見られた。また経路主要部外表示型言語のハンガリー語では着点の有無によって動詞接頭辞の使用に、ロシア語ではその選択に差異が見られ、英語では動詞のテンス・アスペクトに違いが観察された。このように、移動事象における着点の有無が、言語によって異なる形で表現形式の選択と関わることが分かった。

[D-4]

二重対格制約の心理的実在に関する実験研究

佐藤俊樹・玉岡賀津雄

二重対格制約(double-o constraint)では、一つの節の中に 2 つ以上の対格(ヲ格)が現れてはならないとされている(Harada 1973; Hiraiwa 2002; 柴谷 1978; 脳波実験は、備瀬・坂本 2011)。本研究は、こ

の制約が個別言語の制約として心理的に実在し、文処理において参照されているかを検証した。日本語母語話者に対して、実験群として他動詞使役文の正文・非文のミニマルペアと統制群として三項動詞文の正文・非文のミニマルペアを刺激とする迷路課題(maze task)を課した。実験の結果、この制約に違反した他動詞使役文・非文条件は、他動詞使役文・正文条件に比べて反応時間が有意に長かった。同様に、与格(ニ格)の連続である三項動詞文・非文条件は三項動詞文・正文条件に比べて反応時間が有意に長かった。さらに、実験群の効果量(非文と正文の反応時間の差)は統制群の効果量よりも有意に大きかった。この結果は、二重対格制約が心理的に実在し、日本語の文の処理において制約として参照されていること示している。

[D-5]

Only in syntax: Syntactic derivation of lexical compounds in Japanese

Koji SHIMAMURA and Takayuki AKIMOTO

We will investigate a case of the argument frame alteration in Japanese, which is recently discussed in Kishimoto (2010). He observes that a certain argument frame that is originally impossible becomes possible when a V-V compound is rendered (e.g. the verb *sik* 'set' vs. the V-V compound *siki-tume* 'set-fill') and contends that this is a result of perspective shift in the sense of Pinker (1989). We argue, however, that such an argument frame alteration is illusory, providing a purely syntactic account without the notion of argument frame alternation. Specifically, we propose that the verb *sik-* can enter into two different argument structures, which is created in the syntax and the second verb *tume-* is a morphological realization of little *v*.

[D-6]

On the (Ir)regularity of Dunan Verbal Morphophonology

Brent de Chene

The complexity of Dunan (Yonaguni) verbal inflection has elicited comment from a number of researchers. In a recent article (*Handbook of the Ryukyuan Languages* 449-478), Yamada, Pellard, and Shimoji present a very explicit form of this "complexity thesis" as it concerns morphophonology, claiming about variation in the shape of both stems and suffixes that "There is generally no synchronic phonological motivation for these alternations" and about stem alternations in particular that postulating rules to account for them would be "pointless". In this presentation, I argue that while the morphological conditioning of certain stem alternations is unquestionably complex and arbitrary, Dunan verbal morphophonology is in most respects systematic and rule-governed, showing only a limited amount of listed allomorphy.

[D-7]

How many times is the action repeated?

Shoko Shida and Kentaro Nakatani

It is suggested in previous studies that semelfactive predicates allow repetitive interpretations. However, it is not clear to what extent semelfactives are inherently repeatable. We conducted a questionnaire about the number of times an activity denoted by the predicate could be repeated. We varied objects while making verbs constant, and vice versa. The results show that the number of repetition differs depending on the characteristics of verbs and the objects. This suggests that the combination of the verb and its object determines the repeatability of the action. We present a formal analysis using Van Geenhoven's (2005) pluractional operator and Pustejovsky's (1995) qualia structure.

[E-1]

チェコ語の所有動詞 *mit* が表す「学校がある」について

浅岡 健志朗

チェコ語の動詞 *mit* を中心とする他動詞文（所有文）は、主語「私が」目的語「学校を」という形式で「（今日）私は学校がある」に相当する意味を表す。「仕事」「試験」「歯医者」などの他「ヤン」のような固有名詞もこの種の所有文の目的語となり得る。

本発表では、典型的な所有から逸脱するこの種の所有文が表す関係を、「主語が、目的語によって喚起されるフレームに含まれる（一連の）出来事に、何らかの規範に鑑みて、参与するべきであるという関係」として分析する。例えば主語「私」が学生の場合、「私」が目的語「学校」のフレームに含まれる一連の出来事に、〈学生は登校日には学校に行かなければならない〉という規範に鑑みて、学生として参与する（登校する、授業を受ける等）べきであるという関係が成立していることが表される（主語指示対象が教師の場合には、教師としてこの一連の出来事に参与するべきという関係が表される）。この種の所有文の事例は動詞 *mit* のモーダルとしての用法「～すべきだ」と連続的に位置づけることができるだろう。

[E-2]

「自分」の再帰用法と述語の意味制約

小栗 哲哉

日本語の再帰代名詞「自分」が先行詞と同一述語項(co-argument)となる再帰用法について考察する。再帰用法の「自分」は、共起する述語に一定の制限があることが先行研究で指摘されている(McCawley1972, Aikawa1999 など)。本発表では、Hirose (2002, 2014) で提案された「客体化された自己」分析(cf. Lakoff 1996)を採用した上で、再帰用法の「自分」がもつ次の2つの意味的特性から、共起可能な述語の振舞いを説明する。(i)再帰用法の「自分」は無標の場合、事態の因果連鎖において先行

詞と同じ時空間的位置に投錨される参加者を表す。(ii)意識主体から切り離された客体化された自己を表すため、異なる意識主体を対象とする行為と相容れない。結果として、これらの特性と意味的に適合する述語のみが、再帰的「自分」と共起可能となる。

本発表では、「自分」が直接目的語として生起する事例以外に、従来あまり注目されてこなかった間接目的語として生起する事例も考察し、当該分析の妥当性を論証する。

[E-3]

中国語動量詞の適用とイベント構造

王 丹楓

現代中国語では、動作行為を数えるときに、数は一般的に動量詞と共に用いられる。中国語文法（周2012など）においては、動量詞は始点・終点のある動詞としか共起しないとされている。しかし、動量詞は始点・終点のない動詞と共起できる場合がある。本研究は、動量詞はどのような条件で適用されるかをイベントという観点から、達成動詞や活動動詞と動量詞との共起関係を考察する。中国語の動量詞がイベントを数えるものであり、[+stages]という概念と強く結びついていることを示した。動詞は[+stages]の条件を満たせば、可算的なイベント設定することができ、動量詞と共起できると言える。動詞のうち、活動動詞、到達動詞は時間表現や語用論的な解釈で[+stages]になることが可能であるが、状態動詞だけは[+stages]にならないのでイベントを設定することができず、動量詞と共起できない。達成動詞は本来[+stages]であり、動量詞と共起できると言える。

[E-4]

中国語の時間認識について

— 「左」「右」を伴った新たな時間表現を中心に —

鄭新爽

空間を使った時間メタファーは、通常、前後軸・上下軸が用いられており、左右軸を用いた時間表現は存在しないという指摘がなされている（Radden 2011）。しかしながら、中国語には、左右軸を用いる時間表現がある。しかも、(1)に示すように、必ず「左」で「過去」、 「右」で「未来」を表し、その逆は見当たらない。

(1) a. 左手是过往，右手是未来，中间是现在... 《人民日报》2015)

(左手は過ぎ去った過去，右手は未来，真ん中は現在で...)

b. *左手是未来，右手是过去。（*左手は未来で，右手は過去である...）

本発表では、認知言語学の枠組みを用い、このような言語現象の背後にある認知プロセスを明らかにする。そして、書字体系などに動機付けられる人間の *mental scanning* や身体性、メトニミー認知能力などが段階的に作用することによって、このような言語表現が出現するようになったと提案したい。

[E-5]

There comes 時間表現構文の意味機能と否定文との関わり

三野 貴志

これまで *there* 構文に関する先行研究で、(1)のような一般動詞を伴う *there* 構文の否定文は容認されないと指摘されてきた。

- (1) a. *There didn't appear a new fact in the meeting.
b. *There didn't stand a statue on the park.

本研究では、(2a)のような現在時制の *comes* が生起する *there* 構文で、意味上の主語に *time* や *moment* などの時間表現を伴う構文(以下、*There comes* 時間表現構文と呼ぶ)は、(2b)のように否定文でも容認されることを示す。その上で、*There comes* 時間表現構文の意味的・統語的特徴を記述し、当該構文がなぜ否定文で容認されるかを検討する。

- (2) a. There comes a time when you have to face reality.
b. There does not come a time when you have to face reality.

結論としては、(A) *time* が具体的な時ではなく総称的な時を示し、(B) *come* が表す移動が希薄化している、という二点の事実から、当該構文は *when* 節に焦点が移動し否定辞 *not* は *come* が表す移動ではなく *when* 節が示す内容を否定すると解釈されるため、*There comes* 時間表現構文は否定文でも容認されることを主張する。

[E-6]

英語の単数形可算名詞と「度量の属格」：HPSGによる分析

前川 貴史

英語においては、単数形可算名詞と限定詞の統語的關係について次のような一般化が可能である。

- (1) 英語の単数形可算名詞には限定詞が義務的である。

この一般化の観点から、「度量の属格 (genitive of measure)」(Curme 1931:83) が用いられた名詞句の構造 (e.g., an *hour's* delay) を考察する。

度量の属格は、(2) において限定詞の後ろに位置しているように、主要部名詞に対して修飾語として機能する。

- (2) a [ten days'] absence (Quirk et al. 1985:1333)

本発表では特に以下のような構造に注目する。

- (3) this [hour's] delay (Huddleston & Pullum 2002:470)

この例において、限定詞 *this* は *hour's* ではなく *delay* を限定している。よって *hour's* は単独で度量の属格を形成し、主要部名詞 *delay* を修飾する。そうすると、単数形可算名詞である *hour's* が義務的に必要とする限定詞がこの構造には存在しないことになり、一般化 (1) に従っていないように見える。本発表は、(1) の一般化を Head-driven Phrase Structure Grammar の枠組みにおいて定式化し、度量の属

格が functor (Van Eynde 2006 など) であると分析することによって、一見特殊な (3) などの名詞句の構造を説明する。

[E-7]

英語の不定詞関係節と be to 不定詞について

西前 明

the fork [to eat the dessert with]のような不定詞関係節(Infinitival Relatives)およびそれと表面上同じに見える不定詞節が be 動詞に後続する The fork is [to eat the dessert with].のような例について考察する。(少なくとも関係節の)to 不定詞の to は前置詞の範疇素性[+p]を持つと仮定し、そのような to が主要部である TP を prepositional TP(=pTP)と名付ける。IR において関係詞は pTP の指定部を占めると仮定する。さらに、PP(ゆえに pTP)の指定部が A 位置であると仮定すると、IR において空所が埋め込まれた定形節の中にあると容認度が下がるという Ross (1986)で報告された現象を説明できる。CP の指定部(=A' 位置)から pTP の指定部(=A 位置)への関係詞の移動はいわゆる improper movement となる(*the cot [_{pTP} which(A) to PRO arrange [_{CP} which(A') that Mary should sleep on which]]). [be+to 不定詞]については、(a) the fork [to eat the dessert with]; (b) the fork [with which to eat the dessert]; (c) the fork [to sterilize]; (d) the fork [to be sterilized]; (e) The fork is [to eat the dessert with].; (f) *The fork is [with which to eat the dessert].; (g) *The fork is [to sterilize].; (h) The fork is [to be sterilized].の中で、なぜ(f)と(g)が悪いのかを説明する。IR には modal の解釈と nonmodal の解釈があるという点がポイントとなる。

[F-1]

ノダ文：命題の性質

蒲地 賢一郎

本研究は、文中でノダに先行する、命題(主語+述語)の性質は、条件文の前件の性質(赤塚(1998))に類似していると主張する。ノダを含む文は、一例として次のようなものである。(濡れている道路を見た状況での発話として、)雨が降ったんだ。この場合、命題は「雨が降った」の部分とする。この命題の意味論的な特徴を考察していく。赤塚(1998: 31)は、「発話の場で初めて話し手の意識のなかに入った情報は、たとえ話し手がある場で真と信じて、その瞬間にはまだ非事実である」と述べている。そして、この情報は realis と irrealis を基準とした認知スケールで表示され得る、というのが赤塚(1998)の提案である。ノダ文に関する先行研究として、まず、名嶋(2007)と野田(1997)を取りあげていく。

[F-2]

現代韓国語の「-n kes-ita」文の「主題-解説」構造と意味解釈プロセス

李 英蘭

本研究の目的は、現代韓国語の文末に現れる「-n kes-ita (以下、kes-ita と表記)」文を「主題－解説」構造の観点から考察することにより、先行研究において明確ではなかった kes-ita の基本的な働きを明らかにし、kes-ita 文の全体像を示すことである。

kes-ita 文は、統語構造の違いによって、①名詞文、②疑似名詞文、③非名詞文という三つに分けることができる。そして、kes-ita の基本的機能は、「kes-ita 文の意味解釈には kes-ita で表される部分以外に、もう一つの情報（主題）が必要であることを示す」ことであり、kes-ita 文の意味解釈のプロセスにおいて、主題が文の表現形式に明示的に現れているか、先行文脈や状況から容易に探すことができる名詞文や疑似名詞文としての kes-ita 文の場合は、主題について何かを述べていると意味解釈される。それに対し、文の意味解釈に必要な主題を先行文脈や状況から容易に探すことができない非名詞文としての kes-ita 文の場合、後続発話への関連を示唆するものとして解釈される。

[F-3]

事態関係の典型性と事態関係の客体化について
-テ形接続に見られる「逆接」の意味に着目して-

松浦 幸祐

本発表の目的は、認知文法の観点から、日本語のテ形接続構文の意味に関する考察を行うことにある。特に、この構文が表すとされる「逆接」の意味解釈について議論した上で、テ形接続構文の多義のモデルを提案する。本発表ではまず、日本語記述文法研究会 (2008) や仁田 (1995) に代表される先行研究の問題点が、意味を離散的に捉える点にあると指摘する。それらの先行研究は、テ形接続構文の意味解釈に「継起」「逆接」「付帯」等の意味を離散的に設定する故に、多くの例外を含んでしまう。次に、この問題点を乗り越える為、Croft (2003: 283) による、言語は本質的にヴァリエーションを持つという考え方を前提に、認知文法の枠組み (Langacker 2008)、特に主体・客体的解釈の認知モデルから多種類の用例を分析・検証する。また、その中で、テ形接続構文の「逆接」の意味は、テ形自体には還元され得ず、言語が示す事態関係と言語主体が持つ百科事典的知識との認知的不調和によるものであると主張する。

[F-4]

「よく食べる」構文における「が/を」交替の検証

平田 裕

現代日本語において「が/を」交替が観察されるのは、述語が「飲みたい」等の願望形、「話せる」等の可能形、または「好きだ/嫌いだ/欲しい/分かる/出来る」、そして「AはBが/を馬鹿だと思う」などの例外的格付与など、特定の構文であるとされている。先行研究では一般的な他動詞での「が/を」交替は指摘されていない。本発表では「カレーの方がよく食べる」に類するものを“「よく食べる」構文”と呼ぶことにするが、一般的な他動詞でも「が/を」交替が起こり得ることを示し、その成立条件を考察する。結論として、頻度・量・比較などの副詞句や他の付加要素によって出来事の状態性(状

況性, 習慣性) が変わり, それがガ格目的語の容認度につながっている, つまり, 他動詞が単独でガ格目的語の格付与を行っているのではないと主張する。また, この現象の考察は, ヲ格以外の助詞とガ格の交替現象にも統合的な説明をもたらすことを示す。

[F-5]

V テイク・V テクルにおける多義性と再分析

日高 俊夫

現代日本語における「V テイク/テクル」については、両形式の意味や共起する V に関する対照的分析(森田 1968, 吉川 1976, 寺村 1984, 今仁 1990, 澤田 2008)や形式的意味分析(中谷 2008, 日高・新井 2012, Nakatani 2013)等がある。統語構造に関わる分析としては、テイク/テクルの形態論的位置付けを論じた森山 (1988) やテ形複雑述語を分析した Nakatani (2013)、V テイクの統語構造を論じた新井・日高 (2016) がある。本発表は、両形式を対照させながら多義性と統語構造の関係を議論する。新井・日高 (2016) は、V テイクを移動用法とアスペクト用法に分け、前者では主要部移動によって V テイクが形成され(Nakatani 2013)、後者では再分析(Hopper & Traugott 2003)が義務的で、テイクが1つの形態素として語彙挿入されるとする。本発表では、同じアスペクトを表す例に関しても、V テイクと異なり、V テクルでは再分析が義務的でないことを示す。また、移動を表す V テイク/テクルの再分析に関する振る舞いの違いを指摘し、それを統一的に説明することを試みる。

[F-6]

統語的意味合成と語彙的意味合成

工藤 和也

本発表では、動詞の意味拡張には、シンタクスで統語構造に依拠して行われる統語的な意味合成とレキシコンで統語構造から独立して行われる語彙的な意味合成の両方があることを主張する。前者の例として、英語の結果構文を取り上げ、結果構文の可否は LCS などの意味の制限ではなく、純粹に統語的な制約で決まることを指摘する。また、後者の例として、日本語の語彙的複合動詞を取り上げ、語彙的複合動詞の形成においては、統語構造上、重複する意味構造を持つ動詞同士でも様々な合成が可能であることを確認する。そのうえで、日英語の動詞拡張表現の比較から、統語的な意味合成が起こるのは、音韻形態的に顕在的な統語ユニットが存在し、併合により句構造が形成される場合に限られることを述べ、動詞研究における語彙主義と反語彙主義の対立に関して、一つの理論的示唆を与える。

[F-7]

統語的複合動詞の分類再考

大野 公裕

日本語の統語的複合動詞構文は影山 (1993) 以来、以下の(1)–(3)に示すように、3種類存在すると一般に考えられてきた。統語的複合動詞構文はまず後部動詞が上昇動詞(1)かコントロール動詞(2)–(3)かで2つに分かれ、さらにコントロール動詞は自動詞型(2)と他動詞型(3)に分かれる。

(1) 太郎が_i [t_i [ピザを作り]] 終わった。

(2) 太郎が_i [PRO_i [ピザを作り]] 飽きた。

(3) 太郎が [ピザを作り] 忘れた。

Wurmbrand (2001)は、(3)の他動詞型コントロール構文の補部は PRO 主語を持たず、目的語に格を付与しない再構成 (restructuring) 補部であると論じている。そうすると、(1)に分類される上昇動詞の中にも再構成補部をとる構文が存在することが予測される。本発表では、(4)のような文がまさにその予測通りの構文であることを焦点要素のスコープ解釈などを証拠に論じる。

(4) ピザが_i [t_i 作り] 終わった。

本発表の主張が正しければ、統語的複合動詞構文は4種類存在することになり、従来の分類は見直しが必要になる。

[G-1]

反対の意味解釈がなされる日本語命令文の研究

浅野 真菜

(1) a. 馬鹿言え b. 嘘つけ c. ふざけろ d. ほざけ

これら反対の解釈がなされる命令文はどれも、命令文の発話以前に、すでに命令文で表現されているイベントが起きている状況で用いられる(Mori, 2006)。(1c)「ふざけろ」を例にとると、この発話は、聞き手のふざけた行為が発話以前に起きた状況下で、話者が、聞き手のふざけた行為を禁止、または非難するために発話され得る。

このような現象について、本論では、特に以下(2)(3)の観点から、意味論、語用論的考察を提示する。

(2) Epistemic Uncertainty: 命令文を“p!”とした場合、通常の命令文が発話された時点ではpもnot pも、どちらも起こる可能性がなければならないという制約

(Kaufmann, 2012) (cf. Diversity Condition, Condoravdi 2002)

(3)話者の好みに関する制約: 命令文は話者の好みを反映しなければならないという制約 (e.g. #Call Melli! But I don't want you to call her.) (Kaufmann, 2012)

[G-2]

活性化を用いた手続き的意味: 日本語の談話標識「なんか」の事例研究

楊雯淇・上田雅信

関連性理論の枠組みで提案された手続き的意味は、聞き手の発話解釈における推論への制約として定

式化されていた。その後、「制約」の代わりに、「活性化」のアプローチが提案されたが、制約と活性化の経験的な違いはこれまで十分に論じられていない。本発表は、日本語の談話標識「なんか」の分析がこの問題を考察するための経験的基盤を提供する一つの事例になることを示す。発表では、談話標識の「なんか」は聞き手の認知的警戒モジュールを活性化する手続き的意味を持つという分析を提案し、「制約」を用いた分析ではうまく説明できない「なんか」に関わる三つの現象（①後続する命題の省略、②他の談話標識との共起、③共起する談話標識との順序付け）が説明できることを示す。最後に、この分析が心のモジュールの性質や構造の経験的な研究に対して持つ理論的含意について論じる。

[G-3]

「だけ」の項削除

森山 倭成

本発表では、限定を表す取り立て詞「だけ」が項に含まれる場合の削除現象を検討することによって、主に i) PF 削除の優位性、ii) 反一致仮説に基づく「だけ」の項削除の説明を提案する。まず、項削除分析においては広く LF コピーが採られているが、「だけ」に関わる言語データを説明する際に困難が生じることを指摘する。PF 削除と LF コピーという二分法を前提とするならば、前者の方が好ましいと考えられる。次に、取り立て詞「だけ」が一致を通して認可されると仮定することによって「だけ」を含む項の削除現象がうまく説明されると主張する。Saito (2007) に続く反一致仮説の議論に ϕ 素性の有無に係るものが多い中、本提案は、取り立て詞の観点から反一致仮説を支持することになるという点で経験的データの拡張に寄与する可能性がある。

[G-4]

主要部削除と日英語の属格複合語

大久保 龍寛

日本語や英語には、「天の川」や *women's magazine* のような、名詞要素と *linking element* から構成される複合語（以下、属格複合語）があるとされる（cf. Shimamura (2000), Mukai (2008)）。属格複合語に関しては、これまで両言語で質的な差は認められてこなかった。しかし、実際には、主要部削除の適用に関して以下のような違いが観察される。

- (1) a. 太郎は蚤の市、花子は酉の市に行った。
b. *太郎は蚤の市、花子は酉の市に行った。
- (2) a. Taro went to King's college, but Mary went to Queen's college.
b. Taro went to King's college, but Mary went to Queen's college.

本発表の目的は、(1b) と (2b) に見られる、日英語の属格複合語の主要部削除に関するふるまいの違いを説明することにある。具体的には、「音形の同一性に基づく削除」(cf. Booij (1985)) に加え、「焦点投射を介した削除」(cf. Corver and van Koppen (2009)) が存在すると仮定し、前者の適用の可否に関

しては日英語で違いはないが、後者は英語でしか適用されないため、(1b) と (2b) の違いが生じると分析する。

[G-5]

The locus of uncertainty and commitment in speech acts: comparing *daroo* and *wohl*

Lukas Rieser

Japanese and German discourse particles have independently received much attention in formal pragmatics, but more comparative research is needed for a fully cross-linguistic account. I propose a unified analysis of *daroo* (Japanese) and *wohl* (German) explaining puzzling differences they exhibit despite their similar meanings. While both particles behave parallelly in final falling utterances, only *wohl* is good in rising interrogatives (questions), only *daroo* in rising declaratives. I propose a small difference in the way *daroo* and *wohl* modify the Gricean quality threshold, thus determining the locus of uncertainty, explains this: *wohl* indicates uncertainty on the level of first-order belief, shifting uncertainty to the addressee in questions, while *daroo* always indicates speaker uncertainty, accounting for the confirming character of rising *daroo*-declaratives.

[G-6]

終助詞における義務的含意と前提の最大化

井原 駿

本研究は、日本語における終助詞 (sentence-final particles) の生起に働く意味論的・語用論的メカニズムの解明を目的とする。Heim (1991) によって定/不定冠詞の生起に「前提の最大化 (Maximize Presupposition, MP)」が関わることを提案されて以来、定/不定冠詞に留まらず様々な前提トリガー (presupposition trigger) の振る舞いを MP によって捉える試みが為されており (e.g. Percus 2006, Sauerland 2008), 終助詞のように「談話参加者の (心的) 発話態度」を意味として表出する談話助詞 (discourse particles) もその例外ではない (Grosz 2014).

本研究では、まず、MP は日本語の終助詞「よ」の生起に関して経験的に誤った予測をすることを指摘する。その上で、「よ」の生起には MP ではなく「義務的含意 (Obligatory Implicatures; Bade 2014,2016)」が関わることを主張する。具体的には、「よ」を「命題を焦点とする焦点助詞 (propositional-focus particles)」であると定義し、「よ」は発話文の命題内容が文脈における QUD (Question under Discussion; Roberts 1996) への回答として不完全である場合、その不完全性を回避するために義務的に挿入されることを提案する。

[G-7]

日本手話の「列挙浮標」 (List Buoys) について

浅田 裕子

手話言語では、利き手がサインを表出している間、非利き手のサインが静止した状態で保持され、談話上補助的機能をもつことが知られている (cf. Liddell 2003)。利き手が要素を列挙するときに表出する “List Buoys” (本発表では「列挙浮標」と呼ぶ) に関しては、諸言語での研究が進んでいる (Liddell *et al.* 2007 など)。本発表では、日本手話 (JSL) の観察に基づき、列挙浮標には、先行研究で議論されているような非利き手の指を横に伸ばすタイプ(「標準型」)のみならず、非利き手を縦に向け、指を一本ずつ内向きに折りながら列挙する「内向き型」が存在することを示す。更に、本発表では、標準型・内向き型の二タイプでは、意味的・機能的特性が異なることを明らかにし、これらの統語特性の観察を踏まえ、名詞句を列挙する JSL の列挙浮標は、標準型・内向き型ともに等位接続詞であると提案する。内向き型列挙浮標については、日本語話者にも観察される数を数えるジェスチャーとの関連も議論する。

[H-1]

日本語における例外的格付与構文と複合名詞句内に含まれた照応形への束縛に関する研究

田儀 勇樹

本発表では日本語の ECM 構文と照応形の束縛現象について取り扱う。まず、日本語の ECM 構文の先行研究として Kuno (1976)、Hiraiwa (2001, 2005) を概観し、Hiraiwa (2001, 2005) での分析に従い、議論を進める。照応形束縛では、ガ格を付与された埋め込み節の照応形は主節の主語に束縛されることが指摘されている点 (Nishigauchi 1992) に言及する。しかしながら、複合名詞句内の照応形への束縛において、ガ格句とヲ格とで差がみられることを指摘する。この問題の解決策として、日本語の照応形の束縛を「先行詞は照応形を 2 つのガ格を与える TP を超えて束縛できない。」という仮説により、問題点の解決を図る。また複合名詞句が日本語の間接疑問文の主語として生成された時と他動詞の目的語に生成された時にも同じ振る舞いが見られる点から本仮説の正当性を主張する。

[H-2]

「も」の解釈への統語論的アプローチ

—累加と全称を中心に—

榎原 実香

日本語の「も」は前後の文脈や生起環境によって多様に解釈される。本発表では、不定語と結びつき「全て」を意味する「も」を①全称の「も」、他の同類の事態を想定させる「も」を②累加の「も」と呼び、「も」の基本義を累加とした上で「も」の二つの解釈が統語構造によって説明されることを示す。まず、「も」の助詞残留の例から、①全称の「も」は主要部に付加し不定語と一致関係にあること、②累加の「も」は最大投射に付加し一致に関与しないことを主張する。さらに、①全称の「も」と②累加の「も」の両解釈が生じる「誰をたたいた子どもも叱りましたか」のような構造では、①の解釈の場合、wh 素性が指定部・主要部の一致 (Spec-head agreement) のもと「も」が付加された主要部によって照合されるのに対し、②の解釈の場合、wh 素性が「も」ではなく CP の主要部「か」によって照合されることを述べる。

[H-3]

変化内在関係節の再考察

澁谷 みどり

いわゆる主要部内在関係節において、節末の「の」は補文辞とされ、「関係節+の」の意味は関係節内の項の名詞句の意味と同じである。一方、一見形の似ている、変化内在関係節とよばれる節においては、節末の「の」は(代)名詞とされ、「関係節+の」の意味は関係節内の項の名詞句の意味が変化したものである。この場合の関係節直後の「の」の範疇と関係節内の項の名詞句の意味の変化の2点がなぜ連動するかについてはあまり論じられていない。本研究では、関係節内にあらわれる動詞の意味を語彙概念構造 (Jackendoff, 1990) による形式的な表示で与え、特に変化内在関係節では BECOME 関数が存在する動詞が使われることを示す。また、生成語彙意味論の枠組み (Pustejovsky, 1995; 影山, 2005; Hidaka, 2011) と Basilico (1998) の VP 構造の考えを利用し、意味構造から2つの関係節の統語的な違いを予測することを目標とする。

[H-4]

日本語受動文における「られ」と「に(よって)」句の範疇と統語的位置

片岡 恋惟

本発表では、日本語の所有受動文と間接受動文に対し Pykkänen (2008) による適用分析を基本的に取り入れ、さらに取り立て詞による「VP 接続テスト」を用い、それらの受動文に直接受動文を含めた3種類何れの受動文においても「に(よって)」句は「られ」よりも上、つまり主節要素であることを論じる。それぞれの受動文に対する構造は以下である。

- (1) _____ [VoiceP [PP 学生に(よって)] [VoiceP [vP 先生が 批判さ] (ら)れ Voice]] た
- (2) _____ [VoiceP [PP 泥棒に(よって)] [VoiceP [vP [AppIP 花子が [指輪を Appl]] 盗ま] (ら)れ Voice]] た
- (3) _____ [AppIP 太郎が [AppI' [PP 息子_iに] [AppI' [VoiceP PRO_i [vP 死な] Voice] (ら)れ Appl]]] た

「られ」は直接受動文(1)と所有受動文(2)では(受動) Voice であり、間接受動文(3)では VoiceP を補部取る適用主要部と考える。また、「に(よって)」句の範疇と統語的位置に関しては、直接受動文と所有受動文では VoiceP への PP 付加詞、間接受動文では Appl' への PP 付加詞である。そして、間接受動文における「に」句は Voice 指定部にある PRO 主語をコントロールする。

[H-5]

古代日本語における無生物主語の受身文について

古代日本語の受身文は、文が表すイベントによって、有生物が何らかの心理的影響をうけている状況を表す構文であると考えられている。一方、心理的受影者になりえない無生物を主語とする受身文の存在も報告されており、これらの無生物主語の受身文を有生物主語の受身文と同様に扱うすべを研究者が議論してきた (山田 1908, 原田 1974, 小杉 1979, Kuroda 1979, 金水 1993)。本発表では、古代日本語において、間接受身文に関与している動詞と組み合わせられることによりその動詞に新たな項を加える「加項ラレ」とは別に、英語受身文等に関与する動詞の外項を取り除く接辞(「除項ラレ」)が存在していたのかという問題提起を行う。Hayashishita & Takai (2017) の現代語の受身文の分析を基に、古代日本語の無生物主語の受身文を考察し、一部のものに関しては「除項ラレ」が関与していると考えるのが妥当であると論じる。

[H-6]

対比のハの否定極性について

井戸 美里

本発表では、対比のハに否定極性を持つものがあることを指摘する。対比のハの否定極性は、小林 (2009)ですでに指摘がある。しかし、対比のハは、肯定文にも否定文にも現れることから、シカや wh-モなどの他の日本語の否定極性表現と同じシステムでその性質を捉えることができなかった。

一方本発表では、性質の異なる「対比のハ」を切り出すことで、対比のハにシカなどと同様の否定極性があることを示す。具体的には、肯定文に現れる対比のハは、「小さい」従属節には埋め込むことができない有標なものであるか、意味的に異なる対比のハであることを指摘する。本発表ではさらに、否定文に現れた対比のハは、否定とのスコープのインタラクションを起こさず、統語的な分布が否定極性表現シカと一致することを指摘し、これらの現象は、対比のハに否定極性があると仮定することで自然な説明が可能であることを示す。

[H-7]

属性叙述受動文の描く世界

三原 健一

本発表では、次の順に議論を行い、最終的には、日本語の属性叙述受動文における「属性」の起源を明らかにすることを目的とする。(1)属性叙述受動文には、事象を認知する「潜在的認知者 (Implicit Sentient)」が存在し、事象に即応して、潜在的受影者・観察者・経験者・評価者などとして機能する。(2)属性叙述受動文で多発する「(られ)ている」は、描写されている事態に対する、潜在的認知者による一時的認知の継続を表す。(3)属性叙述受動文は、主語の属性を叙述することを旨とするので状態

文であり、このことは、程度副詞との共起状況や、その他のテストで証明できる。(4)属性叙述受動文とは、それが発話される典型的環境の中でアフォードされる幾つかの選択肢の中から、潜在的認知者が「最適解」と捉えるものを選び出し、それを主題句に対する「属性」として付与する構文である。

<ポスター発表 Poster presentations>

[P-1]

Subjects of stative predicates in prenominal sentential modifiers in Mongolian

Yiliqi, Hideki Maki, Lina Bao and Megumi Hasebe

This paper investigates the mechanism of genitive subject licensing in sentences with existential verbs and adjectives in Mongolian, and shows that Mongolian disallows genitive subjects in prenominal clauses with an existential verb, prenominal clauses with a non-bare adjective that contain a gap, and prenominal clauses with a bare adjective. These findings suggest that bare adjectives in Mongolian are in the conclusive form, and do not possess the adnominal form, that the two conditions on genitive subject licensing (D-licensing and adnominal form licensing) proposed in Maki et al. (2016) are both necessary in Mongolian, and that Mongolian requires a third condition that a genitive subject is only allowed in the Spec of T, which does not hold in Japanese.

[P-2]

愛媛県大島宮窪地区の村落手話（地域共有手話）における二種類のタイムライン

矢野羽衣子・松岡和美

愛媛県今治市大島の宮窪地区で使用されている「宮窪手話」は、地域内のろう者と聴者が使用する、いわゆる村落手話（Village Sign Language, Shared Sign Language）の1つである。音声言語・手話言語において「時」の概念が「空間」で表現されることは以前から報告されているが（e.g. Traugott 1978）、村落手話のタイムラインは確立した手話言語のタイムラインとは異なる。本研究では、宮窪手話を第一言語とするろう者の聞き取り調査を行い、宮窪手話に（1）話者の身体を基準点として、右側の空間が「過去」、正面の空間が「現在」を示すタイムライン（Yano and Matsuoka 2016）および（2）太陽の位置（東→西）で「朝一昼一夜」を表す天体タイムライン(celestial timeline, cf. de Vos 2012)が存在することを明らかにした。

[P-3]

日本語を母語として獲得する幼児の TP について：動詞語幹・活用語尾・主格に注目して

團迫 雅彦

本発表は、動詞に接続する諸形式や主格助詞に注目し、日本語を母語として獲得する幼児がどのように TP (時制句) を投射するかについて考察する。具体的には、(1) 動詞語幹と時制辞が接続する形式において、(異なり語数が) 生産的に増える時期はどの時期なのか。(2) ある任意の動詞に複数の活用形が見られるのはどの時期なのか。(3) 主格助詞が接続する名詞の意味役割について、**theme** 項ならびに **agent** 項が現れるのは上記の(1)と(2)と対照させ、どの時期なのかを特定する。本研究では、CHILDES データベース (MacWhinney 2000) における Aki コーパス (Miyata 1995) を用い、幼児 1 名 (Aki) の自然発話の中から動詞文と主格助詞をそれぞれ取り出した。その結果に基づき、本発表では、幼児は (i) 動詞語幹と活用語尾が分化しておらず、どの項に対しても主格を付与しない段階、(ii) 動詞語幹と活用語尾が分化するようになるが、**theme** 項にのみ主格を付す段階、(iii) **agent** 項にも主格を付す段階を経ると主張する。

[P-4]

日本語オノマトペの心像性における母語話者と非母語話者の差異

馬瓊・木山幸子

日本語オノマトペはコミュニケーション上大切な役割を果たすが、非母語話者にとってその習得は簡単ではない。本研究は、日本語母語話者間の会話コーパスでオノマトペの使用実態を調べ、それが母語話者と非母語話者それぞれのオノマトペに対して持つ感覚の強さとどのように結びついているかを検討した。出現頻度、動詞との共起の多様性 (エントロピー)、話者のオノマトペに対する想起しやすさ (心像性) をパス解析とクラスタ分析によって分析した結果、以下の 2 点が示された。第 1 に、非母語話者を見ると会話コーパスで頻度の高いオノマトペほど心像性も強くなるが、母語話者にとって心像性の高いオノマトペは会話コーパスでは頻度が低かった。第 2 に、母語話者は非母語話者より、快感情を表す語に対して強い心像性を示した。母語話者は、オノマトペを獲得する際に情動に強く訴えるような語彙を深く記憶しており、出現頻度に依っていないことが示唆される。

<ワークショップ 1 workshop 1>

[W-1]

音韻部門における回帰的併合

企画・司会：那須川 訓也

従来の生成文法研究において、音韻部門は、心的辞書に蓄えられている音韻特性を文構造構築後に

解釈する装置であると見做されてきた。また、音韻研究で用いられてきた諸階層構造は、形態・統語構造に依存するものと、言語ごとに定められた鋳型的構造を有するもの（音節・素性階層構造）のいずれかであるため、音韻部門には、統語部門のような回帰的併合を駆動力とする構造構築装置は存在しないと考えられてきた（Scheer 2004, Neeleman & van de Koot 2006）。

これに対し、非時系列音韻論では、（言語学的最小単位である）一值的音韻特性の併合により、形態素内の音韻構造が構築（語彙化）されると仮定され、音韻部門においても回帰的併合を駆動力とする構造構築装置が存在すると考えられている。本ワークショップでは、このモデルの妥当性を、各講師が、回帰的併合、強勢、局所性、語根レベル現象、一值的音韻素性による構造構築についての研究を、線形順序を排した表示モデルを用いて発表し、参加者との全体討議を行うことで探る。

[W-1-1]

回帰的併合と強勢

時崎 久夫

句と複合語の強勢は、核強勢規則（NSR）と複合語強勢規則（CSR）によって説明されてきたが、Cinque (1993) は、この2つの規則を一般化し、Xバー構造で最も深い位置に埋め込まれた要素に強勢を付与する規則を提案した。本発表では、この規則を現在のミニマリストの枠組みで再定義し、併合を受けた集合に端末要素を併合する際には、集合に強（S）を付与するという規則を提案する。

また、句強勢・複合語強勢が構造によって決定されるのに対し、語強勢は、語末第2音節など、語の中の線的な位置によって、指定されることが多かった。この発表では、重音節への強勢付与を手がかりに、音節構造が文節音さらには音韻特性の回帰的併合によって作られると考えることにより、句強勢・複合語強勢と同じ仕組みで語強勢が決定されるという可能性を論じる。これが成り立てば、強勢は、句から語に至るまで、すべて同一の規則によって与えられるという一般化が得られる。

[W-1-2]

非時系列的音韻論における局所性と方向性

高橋 豊美

この発表では、非時系列音韻論の枠組で展開される制約的な音韻表示理論を論じる。一般に音韻表示理論では、音韻構造の単一または複数のレベルにおいて、時系列をなす構成素を音韻表示にふくめてきた。そのような構成素の存在は、音韻表示の適格性に関する局所性や方向性などの制約を規定するうえで不可欠なものであった。非時系列音韻論の枠組では、音韻構造はすべて非対称的関係である依存（dependency）により構築されるが、この依存そのものが構成素のあいだの時間的な前後関係を決定することはなく、発話音声の時系列は、音声解釈（音韻表示を音響信号にマッピングする装置）により生じると考えられている。ここで問題になるのは、局所性や方向性という概念で説明されてきた一般化の取扱いであろう。このセッションでは、非時系列的音韻論の枠組においても同様の一般化が可能であることを示すだけでなく、この枠組においてより制約性の高い音韻表示理論が展開できることを

主張する。

[W-1-3]

線形順序を排した英語軟口蓋音軟化の分析

大沼 仁美

本発表では非時系列音韻論の枠組みを用いて英語の軟口蓋音軟化の過程を考察し、当該理論の妥当性を探る。英語の軟口蓋音軟化の多くは、語基の終端に位置する軟口蓋閉鎖音/k, g/が、前舌母音で始まる接尾辞によって後続される場合に観察され、/k/は/s, ʃ/と、/g/は/dʒ/と交替する。この過程は従来、交替の対象となる子音と母音の前後関係に依存した同化現象として分析されてきたが、何故/k/は/ʃ/と、/g/は/z, ʒ/と交替しないのかについての明示的説明は与えられてこなかった。これに対し本発表では、非時系列音韻論では、/k, g/が/s, ʃ/や/dʒ/と交替し、/ʃ/や/z, ʒ/とは交替しないという事実は、線形情報に言及することなく、音韻的最小単位であるエレメントが形成する階層構造上の位置に言及することで説明される。具体的には、軟口蓋音軟化は、構造構築上および外在化上主要な役割を果たしている位置に挟まれた部分を対象とする同化現象であるとみなす。

[W-1-4]

一值的音韻素性を対象とした回帰的併合

那須川 訓也

従来の研究において、レキシコンに蓄えられている音韻特性を文構造構築後に解釈する部門が音韻部門であると仮定されてきた。そうした場合、音韻研究で取り上げられてきた回帰的構造は、形態・統語構造に依存しており、音韻部門で構築する回帰構造は存在しないと言える（Scheer 2011）。統語演算が関与しない形態素内の音節・分節内表示においても、階層構造の存在は認めるものの、いずれの表示理論においても言語毎に定められた鋳型的構造が仮定されており、回帰的併合により構築される構造は存在しないと見做されてきた（Pinker & Jackendoff 2005, Neeleman & van de Koot 2006, Samuels 2009）。

これに対し、本研究では、一形態素の音韻表示を構築（語彙化）する際、一值的音韻素性を対象とする回帰的併合が働いていると仮定する。さらに本研究では、極小論に立脚した構造を音韻表示に拡張し、素性節点、韻律点、オンセット、核、ライム、音節、フットなどの音韻範疇を廃し、一值的音韻素性の回帰的併合のみで音韻構造を構築するモデルの構築を試みる。

<ワークショップ2 workshop 2>

[W-2]

チベット・ビルマ語派における「方向接辞」の諸相

企画・司会：荒川 慎太郎

チベット・ビルマ語派（以下、TB 語派）は、東アジア及び東南アジア大陸部に広く分布し、山地に住する民族によって話される言語も多い。話者の動作が山・水源とどのような位置関係にあるのかは重要な情報である。そのためか、一部の言語には、動詞に付加され移動や動作の方向を示す要素「方向接辞」が発達したと考えられる。また、複数の言語において、方向接辞がムードやアスペクトと相関して用いられるという現象が見られる。

興味深いことに、約千年前に話されていた西夏語と、現代の少数民族語に、共通する音・機能を持つ方向接辞も存在する。ただし、形式・機能・特徴を比較考察すると一様ではない。方向接辞は TB 語派の研究者間で知られてはいるものの、いくつかの言語を比較して再検討する必要がある。本ワークショップでは西夏語をはじめダパ語、ギャロン語、チン語などの方向接辞を扱い、TB 語派の研究だけでなく広く言語学的に有益な情報も提供する。

[W-2-1]

西夏語とムニャ語の方向接辞

荒川慎太郎・池田巧

西夏語は 11～13 世紀中国西北部に存在した西夏国の言語である。死語と化したものの豊富な文献資料によりその姿が知られる。ムニャ（木雅）語は中国四川省で話されている活きた言語で、かつて西夏語との親近性が議論されていた。

両言語は、動詞の方向を指示する 6 種類ほどの接辞群を持つ。「下へ」のように音形・方向が共通するものもあれば、「上へ」のように音形が異なるものもある。ともに、方向を意識せず特定の動詞と結びついたり、接辞の母音交替により方向指示以外の機能を派生させる現象が見られる一方で、ムニャ語の動詞は基本的に必ず接辞を伴うが、西夏語の方向接辞は必須ではなく、ほとんど完了態メーカーとなっていて、方向指示は二次的な機能である。また西夏語では方向接辞は否定辞と共に起しないなどの特徴がある。

両言語における方向接辞の形態・機能の共通点および相違点を浮き彫りにし、ワークショップの基礎となる情報を提供する。

[W-2-2]

ダパ語とギャロン語における方向接辞の対照

白井聡子・長野泰彦

本発表ではダパ語とギャロン語における方向接辞を対照する。前者は機能面で、後者は形態面で、顕著な特徴を持っている。いずれもタンゲート・チアン語支に属し、前者はチアン語群、後者はギャロン語群の一言語とされる。

まず、方向接辞の形態を対比する。ギャロン語は同語支の中でも特に多様な動詞接辞を持つ言語で、方向接辞も 9 種類と、突出している（一部は消失しつつある）。ダパ語は 5 種類で、同語支においては平均的である。動詞に付加される位置にも差異があり、形態論的位置づけの相違を反映していると考えられる。

次に、方向接辞の機能を対比する。両言語は、方向接辞が完了の標識として用いられうるという特徴を共有するが、その振る舞いは異なっている。両者の差異を対照し、方向接辞の文法化の差を明らかにする。

以上の現象を分析することをとおして、両者の特徴を明らかにすると共に、方向接辞の対照研究に向けた分析基準を提案する。

[W-2-3]

ティディム・チン語とジンポー語における方向接辞の対照

大塚行誠・倉部慶太

本発表では、ミャンマー北部に分布するティディム・チン語とジンポー語の方向接辞の対照的考察を行う。これら言語の主要な方向接辞は来辞と去辞であり、これらを扱うことでチベット・ビルマ語派の方向接辞の多様性の一端を明らかにする。

ティディム・チン語の来辞と去辞は、どちらも内容語との間に形式上の類似点はない。一方、ジンポー語の来辞と去辞は、通時的に、動詞の「来る」と「行く」に由来する。両言語の来辞と去辞は、具体的・抽象的移動に加え、アスペクトに関する文法標識としても用いられる。両言語を比較すると、来辞と去辞の機能は多くの点で共通するが、相違も観察される。例えば、ティディム・チン語の来辞は文中の必須要素として現れることがある一方、ジンポー語に同現象は見られない。

本発表では、こうした来辞と去辞の形態・機能の共通点および差異について、両言語を考察した結果を示す。